

# 数量詞遊離の適格性を決定する諸要因について

町 田 健

## 0.序論

日本語は、「主体」と「対象」という意味役割を表示する名詞句については、その名詞句に対応する事物（個体または事態）の個数を表す数量詞が、名詞句を修飾する語句が通常占めるべき位置とは異なった位置を文中で占めることができることが知られている。この統辞的現象を「数量詞遊離」と呼ぶのであるが<sup>1</sup>、三原(1998a)が指摘しているように、主体と対象を表示するすべての名詞句に関して数量詞遊離が許されるわけではない。これは以下の例文が示す通りである。

- (1) a 3人の学生が研究室に来た。  
b 学生が3人研究室に来た。
- (2) a 3人の男がフランス人だ。  
b \*男が3人フランス人だ。
- (3) a 花子は3個の卵をゆでた。  
b 花子は卵を3個ゆでた。
- (4) a 私は2人の同僚を本気で疑った。  
b \*私は同僚を本気で2人疑った。

上の例のうち、(1)と(2)は数量詞によって個数を示された名詞句の意味役割が主体であるもの、(3)と(4)は名詞句の意味役割が対象であるものである。(1)と(3)では数量詞の遊離が許されるが、(2)と(4)では遊離が許されない。これらの文における数量詞遊離の適格性の相違は、三原(1998a)が述べているように、述語の表示する事態の時間的性質の差違に由来するようにも思われる。す

\*1 三原(1998a,b)は、生成文法の枠組みで、数量詞がD構造においてすでに名詞句からは遊離された位置に生成されるという仮定に基づいて、この現象を「数量詞連結」と呼んでいる。本稿は生成文法の立場でこの現象を取り扱うのではないし、また、数量詞は形容詞と同じく名詞の外延である集合を限定する意味的機能を担っており、その意味で日本語の一般的な構成素配列規則からすると、数量詞も、名詞句の前に位置するのが原則であると考えてよいと思われる。つまり、名詞句に後続する位置にある数量詞は、この考え方から従うとすれば、本来占めるはずの位置からは離れた位置にあるということになり、したがって必ずしも「遊離」という名称を使用するのが不適切というわけではない。

ただし、この名称を使用するからといって、後でも述べるように、名詞句の前に数量詞がある時と、遊離した位置に数量詞があるときとで、文が表示する意味が同一であることを主張するものではない。

なわち、詳細は後に検討するが、「来た」「ゆでた」のような非状態述語が使用される文では遊離が可能であるが、「フランス人だ」「疑う」のような状態述語が使用されている文では遊離が許されないということである。<sup>2</sup>

さらにまた、次の(5)が適格な文であることが示しているように、数量詞遊離文の適格性は、述語の表示する事態の時間的性質だけではなく、名詞句と数量詞の間に副詞句等の他の構成素が挿入されているかどうかという、文の構造に関わる要因にも左右されていると考えるべきである。

(5) a私は同僚を2人本気で疑った。

b私は本気で同僚を2人疑った。

本稿の目的は、特に(4b)におけるような、名詞句と数量詞の間に他の構成素が割り込んでいる構造をもつ数量詞遊離構文の適格性が、三原の主張するように、述語の表示する事態の時間的性質に依拠しているのか、それとも他の要因に由来するのかを解明することである。

### 1.三原(1998a)の検討

三原(1998a)では、「名詞句+何らかの構成素+数量詞」という構造の数量詞遊離現象が、Miyagawa (1989)などで主張されているような統辞的要因によってその適格性を支配されているのではなくて、主として述語の時間的性質という、意味的な要因が大きく関与しているのだということが論じられている。

三原の主張の要点は、数量詞遊離、特に先にあげた(4)のように、名詞句に連結している、すなわち名詞句の表示する事物の個数を表す数量詞と当該の名詞句の間に、副詞句等の何らかの構成素が挿入されているような遊離は、述語の表示する事態に時間的限定（アスペクト限定）があって、そのために何らかの形で結果状態を残す場合に許されるということである。そしてこの現象を三原は、述語によって形成される語彙概念構造(LCS)に、数量詞によって表示される「量的状態」が「継ぎ足される」ことによって生じるのだと説明する。

確かに、前節であげた(1)～(4)のような例を見れば、述語句の表示する事態に時間的な限定があるかどうかが、数量詞遊離の可能性を決定する重要な要因であるように思われる。

ただし、語彙概念構造と数量詞による量的状態の「継ぎ足し」によって数量詞遊離を説明する方法だと、「はずれる」「枯れる」「沈没する」のようないわゆる「非対格」動詞以外の、主体の能動的行為を表す自動詞が述語である文の数量詞遊離は説明できることになる。三原はしかし、次のような「適格な」例もあげている。

---

<sup>2</sup> 「疑う」は、「フランス人だ」と全く同じ意味で状態性の述語であると見なすことは適当ではない。このことについては後で詳しく論ずる。

- (6) a 参加者が昨日の超人レースでは 8 人完走した。  
 b 今朝も学生さんが、その雑誌を 5 人買いました。

数量詞による量的状態の継ぎ足しが許されるのが、動詞句の「内項」である名詞句に限られるという構造的制約が設定されていて、(6)の「参加者」と「学生さん」はいずれも動詞句の外にある「外項」であることが、これらの文における適格な数量詞遊離の説明を困難にしている。

三原はこのような場合の数量詞遊離を説明するために、「文脈的アスペクト限定」という概念を持ちだしている。すなわち、(6)では、「昨日の」「今朝も」という表現が使用されており、この表現によってこれらの文が表示する事態に時間的な限定が加えられるというのである。そしてこの限定作用によって、数量詞遊離が可能になるのだと説明される。

しかしながら、(6)から「昨日の」「今朝も」を除いた文であっても、その適格性が劣るということはないように思われる。

- (7) a 参加者が超人レースでは 8 人完走した。  
 b 学生さんがその雑誌を 5 人買いました。

これ以外にも、「文脈的アスペクト限定」が加えられていなくても、同じ条件で数量詞遊離が許される例は数多く考えられる。

- (8) a 若者が飲み屋で 9 人大暴れした。  
 b 力士が土俵で 4 人しこを踏んだ。  
 c フランス人の学者がそのテーマについて 3 人講演した。  
 d スーパーが隣接する地域で 5 店安売りセールを行った。

このような例を見ると、三原の主張する文脈的アスペクト限定が、「外項」である名詞句が使用される文における数量詞遊離を説明する有効な概念として機能すると考えることは難しいよう思われる。

また、たとえ文脈的アスペクト限定を(6)に関して認めるとても、「その超人レースを完走した参加者が 8 人いる状態」や「その雑誌を買った学生が 5 人いる状態」は、認知的に有効な事態として存立できるかどうかということについて疑問が残るし、少なくともこれらの事態の成立を容易に視認することを可能にする状況を想定することは簡単ではない。<sup>3</sup>

---

\*3 (6b) に関しては、5人の学生たちが全員そろって買った雑誌をかかえて歩いているような状況があれば、結果の状態を容易に認知することが可能であるが、そのような事態が生じることは、言うまでもなく稀である。

そもそも三原の言う、数量詞によって表示される「量的な結果状態」（すなわち動詞が表示する「結果状態」と数量詞が表示する「量的状態」の合成された事態）は、三原自身が述べているように、「発見する」や「読む」などの動詞に関しては甚だ想起しにくい。しかも、数量詞によって量的な結果状態が表示されるまでのメカニズムが、語彙概念構造を用いた説明では明確に与えられているとは言い難い。

以上のように、述語によって表示される事態の時間的限定性という観点から数量詞遊離現象を分析する三原の立場には、いくつかの解決されるべき問題点がある。本稿では以下において、述語の表示する事態の時間的限定性とは別の観点から、数量詞遊離の可否を論じる。

## 2.主格名詞句と数量詞遊離

### 2.1.1.恒常的状態を表示する述語

主格名詞句（＝「ガ格」名詞句）<sup>4</sup>に関する数量詞遊離は、すでにあげた(2)に見られるように、述語が「フランス人だ」のような恒常的状態を表示している場合には不適格であるとされる。一方、三原が指摘しているように、述語が状態性の事態を表示するものであっても、それが一時的な状態であれば、数量詞遊離構文は適格となる。

(9) うちの動物園では、カバがまだ3頭元気だ。

(10) この団地には、フランス人が3人いる。

状態性述語の表示する事態の時間的性質の相違による数量詞遊離の可否を、三原は、一時的状態であれば変化の結果を含意するため、「量的状態」の継ぎ足しが起こりうるからであると説明している。

しかしそもそも「状態」という種類の事態は、たとえそれが一時的な状態であったとしても、誰にとっても明示的な結果を残さないのが普通である。「財布が落ちる」という事態の結果ならば、その財布がどこかの場所（通常は道路や床など）に存在するという明らかな結果を残す。一方、(9)の「カバが元気だ」という事態が終了した後に生ずる事態としては、「カバが病気だ」「カバが弱っている」「カバが死んでいる」などの事態が想起されうるが、そのどれを「カバが元気だ」という事態の「結果」と認定するのかは困難である。

何より、例えば「カバが病気だ」という事態の成立を、「カバが元気だ」という事態の結果だと見なす行為と、「財布が道路に存在する」という事態を「財布が落ちる」という事態の結果だと見なす行為は、認識的な性質が同じだとは言えない。すなわち、「カバが病気だ」という事態

---

\*4 本稿では、格助詞「が」を伴う名詞句を「主格名詞句」、格助詞「を」を伴う名詞句を「対格名詞句」と称する。

を「カバが元気だ」という事態を契機として、結果的に成立せしめられた事態だと認識する人間は多くないだろうと思われる。

さらにまた、(10)のような「フランス人がいる」という事態が、「財布が落ちる」と同様の意味で結果を残すことがないのも「カバが元気だ」の場合にもまして明らかである。人がある場所に存在した痕跡は、犯罪捜査によって解明されるというような極めて特別な場合を除いては、通常の人間には認識することができない。

したがって、状態性述語をもつ文に関して、数量詞遊離の適否を説明する原理が、結果として生ずる事態の生起の有無であるとする議論は、妥当性を欠くものと判断せざるを得ない。それでは、恒常的状態が数量詞遊離を許さず、一時的状態が遊離を許す原因は何なのであろうか。

### 2.1.2. 主体が「が」で表される場合

まず、数量詞遊離構文における数量詞の意味であるが、数量詞が名詞句に先行する位置にある場合と同じではない。

(11) a 8人の男が死んだ。

b 男が 8人死んだ。

数量詞が名詞句に先行している場合には、この数量詞は「何らかの（助数詞「人」で数えられる）対象を構成要素として含む事態が 8 個ある」という意味を表している。もっと簡単に言い換えるれば、ある 8 個の対象すべてについて、何らかの事態が成立しているということである。この意味を形式的に表示すると(12)のようになるだろう。<sup>6</sup>

(12)  $\lambda P \lambda Q 8x(P(x) \& Q(x))$

ただし、 $Nx C(x)$ は、「 $C(x)$ で表示される事態が  $N$  ( $N$ は自然数) 個ある」という意味を表すものとする。<sup>7</sup>一方、(11b)のように数量詞が名詞句から遊離している構造では、すでに名詞句が与えられているので、「男である集合の要素を構成要素として含む事態が成立しているのだが、その個数は 8 個である」ということになる。

\*5 日本語の助数詞は、名詞の表示する対象の下位分類を示す働きをするが、本稿ではこの問題には立ち入らない。

\*6 本稿は、文や形態素の意味を形式化することを目的とするものではないので、使用される式はあくまで意味の理解を補助するだけのものである。Montague(1974)でとられているような、内包理論式への翻訳などは行わない。

\*7 (17) が真となる条件は、 $\|P(x) \cap Q(x)\| = 8$ である (Carpenter(1997:87))。日本語の名詞は、形態的に数を表示することがないので、その意味を形式的に表示するのにも、このような方法をとるのは適切だと考えられる。

そして、(11b)をその構造に従って解釈してみれば分かるのだが、「男」の表示する集合の要素の個数を「8人」という数量詞が表示することは、間接的に保証されているにすぎない。このことは、例えば(13)のように述語が他動詞であって数量詞が遊離している文の意味が曖昧であることからも検証される。

(13) 男が8人検査した。

「8人」は、主体である「男」の個数であるのか、検査した対象の個数であるのかは、この文だけからでは確実に解釈することは不可能である。

したがって、数量詞遊離が見られる(11b)のような文における数量詞の解釈は、「名詞句によって表示される集合が主体であるような事態がある個数成立していて、同時に、数量詞の表示する個数だけ同じ事態が成立しており、他にそれを妨げる特別の条件がないので、名詞句の表示する集合と数量詞の表示する集合は同じものだ」ということである。また、二つの集合が同じものであるならば、(11b)の「男」を構成する要素の個数と「8人」の個数を比べると、前者のほうが後者よりも多い。すなわち、「男」によって提示された集合の真部分集合であるのが、数量詞「8人」によって形成される集合だということである。

以上の内容を反映する形で(11b)における数量詞の意味を形式化すると、(14)のようになる。

(14)  $\lambda P \lambda Q Nx8y(\text{男}(x) \ \& \ (P(y) \ \& \ Q(y)))$

ここで、Pが「男」を表す述語であるとすると、今度はyによって要素が表される個数8の集合は、xによって要素が表される個数Nの集合の部分集合になるのだから、(14)は(15)のように表される。

(15)  $\lambda P Nx8y(\text{男}(x) \ \& \ (\text{男}(y) \ \& \ P(y)) \ \& \ \forall y (\text{男}(y) \rightarrow P(x))$

さらに、名詞句に対応する個体の集合と、数量詞に対応する個体の集合が等しいことが状況によって明示された場合には<sup>8</sup>、 $x=y$ かつ $N=8$ なので、次の(16)のようになり、これは先に(11a)に対してあげた(12)のPを「男」に置き換えた式に等しい。

(16)  $\lambda P 8x(\text{男}(x) \ \& \ P(x))$

<sup>8</sup> 「金魚が水槽に四匹いる」「本が机の上に四冊ある」のように、文が使用される状況中に他の「金魚」や「本」が含まれていないことが明らかな場合など。

この方式で、述語が恒常的な状態を表示する場合を考えてみよう。先にあげた述語が「フランス人だ」である文を以下に再掲する。

- (17) a. 3人の男がフランス人だ。  
 b \*男が3人フランス人だ。

(17a)は、「ある男がフランス人だという事態が3個成立している」という意味を表しており、この意味であれば(18)のように形式化される。

- (18)  $\exists x (\text{男}(x) \ \& \ \text{フランス人}(x))$

しかし、ここで注意しなければならないのは、「フランス人だ」が恒常的な状態を表す述語であって、この述語が表示する事態の主体が「が」を伴う名詞句によって表されている場合には、ある範囲の個体の中でその名詞句が表示する個体「だけ」が主体であるという、「排他性」が生じるということである。<sup>9</sup>

この性質を考慮に入れて(17a)の形式的意味表示としての(18)を修正すると(19)のようになる。

- (19)  $\exists x (\text{男}(x) \ \& \ \text{フランス人}(x) \ \& \ \neg \exists y(y \neq x \ \& \ \text{フランス人}(y)))$

次に(17b)を、同様に「が」によって生ずる排他性と、数量詞遊離構文による「男」と「3人」の関係を考慮に入れて形式的に意味表示すると、(20)のようになる。

- (20)  $\text{Nx3y } (\text{男}(x) \ \& \ (\text{男}(y) \ \& \ \text{フランス人}(y)) \ \& \ \forall y(\text{男}(y) \rightarrow \text{フランス人}(x)) \ \& \ \neg \exists z(z \neq x \ \& \ \text{フランス人}(z))$

この式の表示する意味は、「N人の男がいて、そのうちの3人がフランス人であり、その3人を除いた男たちはフランス人かどうかは分からず、N人の男たち以外はフランス人ではない」という、大変複雑で、このため聞いただけで理解するのはほとんど不可能な事態である。

(17b)が構造的には日本語の文として適格でありながら、意味的には不適格であると判断されるのは、この文が表示する事態が、このように容易な理解を拒絶する性質をもっているからなのだと考えることができる。

\*9 「名詞句+が+恒常的な状態を表示する述語」の場合になぜ排他性が生じるかということについては、町田(近刊)を参照されたい。

### 2.1.3. 主体が「は」で表される場合

しかしこれだけでは、次のように主体が「は」によって表されている場合の数量詞遊離構文が不適格であることが説明されないことになる。

- (21) \*男は3人フランス人だ。

改めて述べるまでもなく、「は」によって主体が表示されている時の文全体の意味は、「が」が用いられている場合の文の意味とは異なる。すなわち、「名詞句+は」は文の「主題」として機能するということである。主題の意味的性質をここで詳しく論じることはできないが、本稿が依拠しているような立場からすると、主題である名詞句の表示する対象は、文が使用される状況においてその名詞句が表示することのできる対象の「全体」であると見なされる。<sup>10</sup>

この性質を反映する形で、適格な文である次の(27)の意味を形式的に表示すると、(28)のようになる。

- (22) 3人の男はフランス人だ。

- (23)  $\exists x(\text{男}(x) \ \& \ \text{フランス人}(x) \ \& \ \forall y((\text{男}(y) \ \& \ \text{フランス人}(y)) \rightarrow y=x))$

この方式で「男は+述語」という構造の文の意味を形式化すれば、次の(29)のようになる。

- (24)  $\lambda P N x(\text{男}(x) \ \& \ P(x) \ \& \ \forall y((\text{男}(y) \ \& \ P(y)) \rightarrow y=x))$

「3人の男はフランス人だ」の部分は、前節で述べたのと同様であるが、次のようになる。

- (25)  $\lambda P \lambda Q \lambda x \exists y(P(x) \ \& \ (Q(y) \ \& \ \text{フランス人}(y)) \ \& \ \forall y(P(y) \rightarrow \text{フランス人}(x)))$

「男は3人フランス人だ」では、PとQがともに述語「男」を表すから、この文の意味の形式的表示は次の(26)のようになる。

- (26)  $N x(\text{男}(x) \ \& \ \exists y(\text{男}(y) \ \& \ \text{フランス人}(y)) \ \& \ \forall y (\text{男}(y) \rightarrow \text{フランス人}(x)) \ \& \ \forall z((\text{男}(z) \ \& \ \text{フランス人}(z)) \rightarrow z=x))$

この文はしたがって、何人かの男がいて、その全員がフランス人であり、その男たちの中に3

\*10 この点についての詳細な議論は、町田（近刊）を参照されたい。

人のフランス人がいる、という意味を表していることになる。このような性質の事態は、男たちの数が3人に等しければ成立する。実際、次の文はこれと同じ事態を表しているので適格である。

- (27) 男は3人ともフランス人だ。

ところが「男は3人フランス人だ」の場合には、数量詞遊離構文の通常のあり方として、「男」が表示する集合の個数は3よりも多いのであった。となると、男たちの全員がフランス人であることと、その中の3人がフランス人であることがともに成立することはないのだから、(21)は不適格な意味を表すことになってしまうのである。

以上のように、述語が恒常的状態を表す場合に数量詞遊離が許されないのは、述語の表示する事態の時間的性質のみが原因となっているわけではなく、主体である名詞句に対応する集合と遊離した数量詞に対応する集合の関係、および主体を表示する形式（「が」または「は」）の意味的機能が関与していると考えられる。

## 2.2. 動作性動詞句

三原は、Miyagawa(1989)であげられた、数量詞遊離が許されない例として、次のものをあげている。

- (28) \*友達が新宿で田中先生に2人会った。

この例において数量詞遊離が許されない理由として三原は、「会った」が表示する事態の結果として、「友達が2人（いる）」のような事態が生ずるわけではないことや、結果を残すことを可能にする何らかの時間的限定を表す表現がないことなどをあげている。<sup>11</sup>

しかし、(28)で数量詞「2人」の位置を移動させると、遊離していても適格な文が出来上がる。

- (29) 友達が新宿で田中先生に会った。

(29)では主格名詞句と数量詞の間に他の構成素が割り込んでいるから、数量詞が名詞句から遊離していることは構造的にも明らかである。なおかつ、述語は同じ「会った」であり、時間的限定を表す表現もないのだから、この文は、三原の基準に従えば不適格となるはずである。ということは、(28)と(29)の適格性の差違を引き起こしているのは、意味的条件の違いではなく、むし

---

\*11 三原は、高見（1998）で指摘されているような、「名詞句+が」が談話の話題となることが、主格名詞句からの数量詞遊離を可能にする一つの条件だと述べているが、「談話の話題」という性質がどのようなものであるかについて明示的な規定があげられているとは言い難いので、ここではその条件は割愛した。

る数量詞の位置なのではないかという予測が成り立つ。

それでは(28)と(29)を比べてみよう。(28)では数量詞は「田中先生に」の直後に位置しているが、(29)では「新宿で」の直後に位置している。両者の違いは何かと言えば、「田中先生」は「2人」によって量化することが可能であるのに対し、「新宿」は「2人」による量化ができないということである。

(30) a 私の学校には田中先生が2人いる。

b \*東京には新宿が2人ある。

のことから、たとえ(28)において「田中先生に2人」が一つの構成素をなすのではなくても、「名詞句+数量詞」という構造である以上、1つの構成素をなすという解釈をされる危険性があって、それがために「友達」を「2人」が量化しているという正しい解釈の妨げになりうるのだと考えられる。実際、(28)と同様の構造をもつ文であっても、数量詞の直前にその数量詞による量化を許す名詞句がなければ、適格な文だと判断される。

(31) 友達が新宿で集会に2人参加した。

(32) 友達が新宿でパーティーを2人催した。

(33) 車が高速道路で料金所を3台通過した。

(34) 車がレース場を激しく3台走り回った。

逆に、(28)と同様の構造をもつ文で、主格名詞句ではなく直前の名詞句が量化される解釈を受ける恐れのあるものであれば、やはり数量詞の主格名詞句からの遊離は許されない。

(35) \*出演した女性歌手がホールで主催者に2人挨拶した。

(36) \*新聞記者が空港でその国の大統領と3人雑談した。

(37) \*大きな岩がその観光地で美しい景観を3個阻害した。

以上のように、結果の状態を生起させない事態を表示する述語をもつ文における、主格名詞句からの数量詞遊離を不適格とする原因是、遊離した数量詞が直前の名詞句を量化できるかどうかという、構造的要因に意味的要因が加わったものなのだとと言えよう。

したがって、主格名詞句からの数量詞遊離（「主格名詞句+何らかの1つまたはそれ以上の構成素+数量詞」という構造）は、原則としてはあらゆる条件において可能なのであり、上で述べたような特別な条件においてのみ不適格とされるのだと結論される。

この論点からすると、高見(1998)であげられている次のような数量詞遊離構文が適格であるこ

とは、特別の説明を要しないごく自然な文であると言える。

- (38) a A:この雑誌、売れてますか？  
 B:ええ、今朝も学生さんがそれを 5 人買って行きました。  
 b 瀧高の生徒は、毎年東大を 80 人以上受験する。  
 c 僕はアパート住まいだけど、最近同僚が家を 4, 5 人次々と建てましたよ。

これらの文においても、「それを 5 人」「東大を 80 人以上」「家を 4, 5 人」という名詞句と数量詞の連続は、数量詞による名詞句の量化が行われているという解釈の余地を与えない。

### 3.目的格名詞句と数量詞遊離

#### 3.1.結果状態を含意しない他動詞

目的格名詞句は、生成文法の立場では他動詞によって対格を与えられる「内項」であるので、三原らにとっては目的格名詞句からの数量詞遊離のほうが、原則としては適格条件に制限のない構文であることになる。しかしながら三原は、次のような数量詞遊離構文は、完全に不適格ではないにしても、適格性が劣るとしている。

- (39) a ?校長先生は生徒を朝礼で 3 人讃めた。  
 b ?私はいたずら坊主を公園で 4 人怒鳴った。  
 c ?僕は友人を駅で 2 人待った。

三原はこれらの文が必ずしも適格とは言えない理由を、「讃める」「怒鳴る」「待つ」のような動詞が結果の状態を残さないからだと説明している。ところが、同じように目的格名詞句とそれを量化する数量詞との間に他の構成素が割り込んでいる構文でも、次のようなものは適格であると判断してよいだろう。

- (40) a 校長先生は生徒をうれしそうに 3 人讃めた。  
 b 私はいたずら坊主をいらいらして 4 人怒鳴った。  
 c 僕は友人をタバコを吸いながら 2 人待った。

このことは、述語動詞が結果の状態を含意するかどうかという基準以外の要因が、目的格名詞句からの数量詞遊離の適格性を決定する働きをしていることを予測させる。上の 3 つの例では、「うれしそうに」「いらいらして」「タバコを吸いながら」のような副詞的表現が、数量詞の後にある動詞を修飾していることが明らかなので、数量詞と副詞的表現の前の名詞句との連結がそれ

だけ容易に理解されやすいという要因が、数量詞遊離を可能にしているものと思われる。以下も同様の理由によって遊離が可能になっている例である。

- (41) a 花子はずっとみなし子を 3 人世話した。  
b 花子はみなし子をずっと 3 人世話した。
- (42) a 掃除人は部屋を 2 つすっかりきれいにした。  
b 掃除人は部屋をすっかり 2 つきれいにした。
- (43) a 私はそばを 3 枚ずるずるかきこんだ。  
b 私はそばをずるずる 3 枚かきこんだ。

さらにまた、(39a)と(39b)は次のように言い換えると完全に適格な文となる。

- (44) a 校長先生は生徒を、朝礼で 3 人、昼休みに 2 人讃めた。  
b 私はいたずら坊主を、公園で 4 人、舗道で 5 人怒鳴った。

すなわち、「朝礼で 3 人」「公園で 4 人」という連続は、統辞的な意味で一つの構成素をなすものではないにしても、意味的には何らかの点で一つのまとまりをなしているものと考えられる。しかしこれらの連続が一つの構成素ではない以上、意味的に一つのまとまりをなすことは、それと何らかの点で対比的な意味を表す表現と並立されることによってのみ明確に伝達されうるのであって、「朝礼で 3 人」に対しては「昼休みに 2 人」、「公園で 4 人」に対しては「舗道で 5 人」のような表現が、その種の対比的な意味をもつものである。

したがって、「名詞句 + 助詞 + 数量詞」という構造の表現に関して、それに対して適當な対比的意味をもつ同じ構造の表現が想起されるのであれば、意味的には適格だと判断することが可能である。

以上より、結果の状態を含意しない動詞を述語とする「目的格名詞句 + 構成素 + 数量詞」という構造の数量詞遊離も、原則としてはどの場合に関しても可能なのであって、「何らかの構成素 + 数量詞」の連結が意味的にまとまりがあることを想起させる場合に、適格性に若干問題がある程度に過ぎないのだと言うことができよう。

### 3.2 心的活動動詞

三原は、述語が「疑う」「信じる」「憎む」のような「心的活動動詞」の場合には、結果の状態が含意されないことがないため、目的格名詞句からの数量詞移動は不可能であるとしている。<sup>12</sup>

---

\*12 筆者の判断では、(45) の各文は完全に不適格だとは言えないようと思われる。

- (45) a \*私は同僚を本気で 2 人疑った。  
 b \*菜穂子は親友をそれでも 2 人信じた。  
 c \*彼は自分を追いつめた男を心から 2 人憎んだ。

(45)の各文の動詞「疑う」「信じる」「憎む」は、それが表示する事態の時間的性質という観点からすると、全く同じ特徴を呈するというわけではない。確かに、主体が一人称である時には、非過去時制の全体相形式（「～る」）<sup>\*13</sup>はいずれも発話時点における心的状態の存在を表示することができる。この点では、これらの動詞は金田一(1950)の「状態動詞」、Vendler(1967)の state verb に分類されるべき特徴をもつことになる。

- (46) a 私はその判決の妥当性を疑う。  
 b 私は神の存在を信じる。  
 c 私はあらゆる犯罪を憎む。

しかし、過去時制の全体相形式（「～た」）の場合には、「疑う」「信じる」はどちらかと言えば状態の変化を表すのに対し、「憎む」は状態の継続を表す。このことは、「疑った」「信じた」が述語の時には、「その時」のような瞬間を表す副詞句とは共起できるのに、「長い間」のような時間的幅を表す副詞句とは共起できないこと、「憎んだ」が述語の時には、共起制限が上 2 つの動詞の時とは逆になることによって例示される。

- (47) a 私はその時その判決の妥当性を疑った。  
 b 私はその時神の存在を信じた。  
 c \*私はその時あらゆる犯罪を憎んだ。  
 (48) a \*私は長い間その判決の妥当性を疑った。  
 b \*私は長い間神の存在を信じた。  
 c 私は長い間あらゆる犯罪を憎んだ。

したがって、少なくとも「疑った」「信じた」という述語に関しては、その事態が完了した後に何らかの形での結果状態を残すはずであって、となると語彙概念構造を用いた三原の方法ではこれらの文における数量詞遊離の不適格性を正しく説明できることになる。

述語動詞の意味的な性質からの説明が成功しないのであれば、3.1節で考えた、構造的な観点

\*13 本稿では、「ている」「ていた」を伴う形式を「部分相形式」、「る」「た」のみを伴う形式を「全体相形式」と呼ぶ。

を加味した説明が考えられる。すなわち、(45a)では「本気で 2 人 (疑う)」、(45b)では「それでも 2 人 (信じる)」という連続体が、「副詞句+N 人 (疑う／信じる)」という別の連続体と意味的に対立しうるかどうかということである。

これに対しては、そのような意味的対立を想定することはほぼ不可能であると言わざるをえないだろう。「本気で 2 人 (疑う)」に意味的に対立する連続体としては、例えば「何となく 3 人 (疑う)」のようなものが考えられないことはないが、現実世界において、「同僚のうちの 2 人を本気で疑い、3 人を何となく疑う」という事態は極めて生起しにくい。実際、次の文は明らかに不適格な文であると判断される。

(49) \*私は同僚を、本気で 2 人、何となく 3 人疑った。

「それでも 2 人 (信じる)」に関しては、「それでも」と意味的に対比されうる表現を想起すること自体が困難である。無理をして次のような文を作り出しても、それが不適格であるのは明らかである。

(50) \*菜穂子は親友を、それでも 2 人、やっぱり 3 人疑った。

以上のように、(45a,b)の文における数量詞遊離の不適格性は、遊離した数量詞とその直前に位置する構成素によって形成される連続体に、意味的に対比されうる同じ構造の連続体が想定されえないという事実から説明されうる。

このように考えると、(45c)において数量詞遊離が許されないのも、同様の観点から説明できると思われる。事実、「心から 2 人 (憎む)」という連続体が表示する意味に対立するものとしては、例えば「うわべだけ 3 人 (憎む)」などの連続体が想定されるものの、「自分を追いつめた何人かの男のうち、心から 2 人を憎み、うわべだけ 3 人を憎む」などという事態が成立することはまず考えられない。

したがって、(45c)の数量詞遊離構文が不適格である理由も、(45a,b)の場合と同様に、「構成素 + 遊離数量詞」という連続体に、意味的に対立しうる同じ構造の連続体が表現として存立し得ないという事実に求めることができる。

#### 4.結 語

本稿ではまず、名詞句と数量詞の間に何らかの構成素が介在している構造の数量詞遊離構文について、その適格性を決定する要因が、三原(1998a)で主張されているような、述語の表示する事態が結果状態を含意するか、あるいは少なくともその事態に時間的限定が加えられているかという性質によるのだとするのでは、合理的に説明することのできない、不適格な数量詞遊離構文

が存在することを論じた。その上で新たに数量詞遊離の適格性を検証した結果、次のような結論が得られた。

- ①遊離数量詞と連結する名詞句が主格であれ対格であれ、述語の表示する事態の時間的性質に関わらず、数量詞遊離が許されるのが原則である。
- ②述語が恒常的状態を表示するものである場合、主格名詞句からの数量詞遊離は不適格である。その理由は、遊離数量詞に対応する集合が、それが連結する名詞句に対応する集合の部分集合であるという性質と、主体を表示する形式である「が」や「は」の意味的機能を考慮に入れて数量詞遊離構文の意味を合成すると、現実世界において成立することが極めて困難な事態が表示されることになるからである。
- ③述語が動作性の事態を表示する動詞である場合、遊離数量詞が、その直前にあって本来量化すべきでない名詞句を量化する解釈がなされうる時には、遊離は適格でない。
- ④対格名詞句からの数量詞遊離が許されないのは、数量詞とその直前に位置する構成素が形成する連続体に対比される意味を表す、同様の構造の連続体を想定することが不可能な場合である。もちろん、数量詞遊離と述語の時間的性質の関連性は未だ否定できないのであって、今後はその観点からのさらに精密な研究が必要となろう。

#### 参考文献

- Carpenter, Bob (1997) *Type-Logical Semantics*. Cambridge/London: The MIT Press.
- Chierchia, Gennaro & McConell-Ginet, Sally (1990) *Meaning and Grammar*. Cambridge/London: The MIT Press.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15
- 町田健(近刊)「主体を表す「は」と「が」の意味的機能」
- 三原健一(1998a)「数量詞連結構文と「結果」の含意」『言語』27-6, 7, 8
- 三原健一(1998b)『生成文法と比較統語論』くろしお出版
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese (Syntax and Semantics 22)* San Diego: Academic Press.
- Montague, Richard (1974) *Formal Philosophy*. New Haven: Yale University Press.
- 高見健一(1998)「日本語の数量詞遊離について:機能論的分析」『言語』27-1,2,3
- 杉本孝司(1998)『意味論1-形式意味論-』くろしお出版
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.